Pick up Feature

新型インフルエンザの影響で1年間の延期となった
国際理解研修（語学研修）が、ようやく実施されました。
待ちに待った研修を、4チームに分かれた国際生たちが報告します。

世界4都市で国際理解研修同時進行!

Bradfield Team【イギリス】

下村萌香さん（普通科）

「今までの自分」から「新しい自分」へと成長できる。それがブラッドフィールドでの経験です。豊かな自然の中で様々な国の生徒たちとコミュニケーションを図り、たくさんのアクティビティをするという普段とは違う時間。出来事や風景が特別に感じられ、語学能力や人間性といった必要不可欠なことを楽しく習得できました。この街で出会えた素敵な友達、先生方や経験は「一生の宝物」と胸を張って言える4週間でした。

Edmonton Team【カナダ】

木ノ下勇矢君（普通科）

カナダの名門校として知られるアルバータ大学は、創立者栗本祐一先生の母校でもあります。私達は、そのアルバータ大学の語学センタープログラム（ESL）で7週間学びました。僕が入ったクラスにも様々な国籍の人がいました。韓国、チリ、ベネズエラ、ブラジル、中国、ベトナム。毎日8時から12時までみっちり行われる授業と必ず課せられる宿題。会話力だけでなく文法の学習もハードです。確実に英語力が向上したという実感を得ることができた経験でした。

Auckland Team【ニュージーランド】

村上奈香恵さん（国際教養科）

研修当初は、ホストファミリーと意思の疎通をとることに戸惑う毎日で大変でした。でも「こんな時こそ頑張らないと!」と決心して、自分から話しかけるようになってから、日常生活が変わりました。多彩な国の人たちと過ごした学校でも、コーディネーターの方々に支えられながら「触れ合い」に心がけました。片言の英語でも、語れば通じるものです。それが小さな自信につながって、もっと語ることができるようになります。臆病にならず、英語を話す機会を生み出す事が大切だと思いました。

Victoria Team【カナダ】

秋山直輝君（普通科）

僕は不安を抱えてビクトリアに出発しました。なぜなら自分の英語力に自信が持てなかったからです。予想通り初めの2週間は苦労しました。会話が成り立ちにくい事もありました。しかし、3週間目からは無意識に英語を話し、いつのまにかメキシコやブラジルなど違う国の人と友だちになれました。英語を使って多くの人々と笑い合える事ができるのです。努力が実って、語学プログラムでは賞をもらうこともできました。

Thinking about the Future ［国際生OB OGから現役国際生へ］

Message to Students

2009年度（普通科 中高一貫コース）卒業生
上智大学 国際教養学部 1回生
丸山 杏那（まるやま あんな）さん

TIMES：大学では何を学んでいますか?

丸山さん：2年生以降の専攻を決定するために、国際関係学や、日本外交史などを学んでいます。また第二言語としてフランス語を勉強しています。

TIMES：進学先に名古屋国際中学校を選んだ理由を教えてください。

丸山さん：私が最重視したのが国際的な環境が整っていること、ITが学べることでした。開校1年というまだ真新しい私立中学校であるにも関わらず、学校改革に熱心に取り組んでいらっしゃると感じたのがオープンキャンパスでの入試相談でした。高校課程に進学した際には留学したいが、新しい学校でそのような環境があるのかと尋ねたところ、そのような生徒を全力でサポートしたい、そのための環境を整えたいとおっしゃった先生方の熱意に、名古屋国際を選びました。

TIMES：名古屋国際の魅力を教えてください。

丸山さん：魅力といえば、生徒も先生方も校風も校舎も、すべてが「THE ONLY ONE」であることです。模擬国連、国際理解講演会、国際理解研修など、名古屋国際でなければ、このような貴重な体験はできませんでした。また私が特に魅力的だと思うのは、職員室に生徒が入りやすいようにガラス張りになっていることです。私は頻繁に友人と職員室に通い、日本人やネイティブの先生方とお話させていただきました。高校に進学しても生きた英語を学び続けられたのは、この職員室があったからだと思います。同級生だけでなく、学校全体での繋がりがある学校です。

TIMES：現在に活かされていると感じる出来事はありますか?

丸山さん：中学1年生の時の国際理解講演会で、カナダから来日してくださったゲストにthanks speechをしたことです。生徒会役員の一人としてスピーチをすることになったのですが、次の年に開催された愛地球博（EXPO2005）で再度来日なさった時、国際生との交流の場で私の名前を出し、スピーチを褒めてくださったことがありました。後日その話を伺った時、本当に嬉しかったのを覚えています。それ以後、本校に訪問してくださったゲストの方々への挨拶や、オープンキャンパス、文化祭などの数々の学校行事の場で生徒代表（プリフェクト）を務めさせていただきました。これらの経験もあって、大学受験の面接や講義内でのプレゼンテーションの際に臆することなく、堂々と人前で自己表現ができるようになったのだと思います。

TIMES：留学での経験について思い出に残っているエピソードを教えてください。

丸山さん：私は名古屋国際でドラマ部（演劇部）に所属していました。その経験を活かして、留学先であるアメリカでもドラマの授業を取りました。滞在先の高校では学内にシアターがあるなど、ドラマにとても力を入れていて、生徒も本気でハリウッドやブロードウェイなどを目指す人たちばかりでした。中でも上級クラスを選択する生徒だけで演じることのできる演劇が一年の最後にあるのですが、ドラマの先生が一年を通じて私の授業での取り組みを評価してくださり、特別に参加させていただけることになりました。最初は発音やディクション（発声法）などで先生に注意され、台詞をもらえず「日本人だから…」と言われ辛く感じた時期もありました。しかし、そのような経験を乗り越えて最後の舞台に立ったとき、努力して本当に良かったと思いました。

TIMES：名古屋国際での英語教育が、滞在先の生活で活かされたと感じましたか?

丸山さん：名古屋国際では、文法や単語に重点を置く従来の日本の英語教育だけではなく、会話や発音、リスニングなどの実際に英語で会話をする際に必要となる力の向上を最優先にしてくださいました。入学前に英語を習ったことのなかった私でも、この英語教育のおかげで、英語で話す際に日本語で考え、英語に訳すことなく、英語を英語のまま考える力を身につけられたので、留学した際には最初から授業に遅れを取らず理解することができました。

TIMES：最後に、今後についての目標を教えてください。

丸山さん：トリリンガルを目指してフランス語を流暢に話せるようになることが、私の直近の目標です。将来はジャーナリストやメディア関係の仕事につき、世界で起こる出来事を人々に伝えられる仕事に就きたいと考えています。後輩の国際生のみなさん、名古屋国際の6年間に出会う人々、友人、経験はそれからの人生を大きく動かします。どんな失敗も恐れずに、自分を奮い立たせていろんなことに挑戦してください。成功した人の足跡をたどるのではなく、自分で新しい道を開拓してください。

▲大学の友人と丸山さん（左）

Special! Interview ――【海外の同僚とともに授業を創る】

教員交換プログラム参加

若宮 崇先生 中高一貫コース（英語科教員）

TIMES：教員交換プログラムとはどのようなものですか?

若宮先生：提携校間を教員が行き来して相互に授業を支援します。昨年には、派遣先のMercy CollegeからVal McKenzie先生が来校され、今年度は私が派遣されたのです。

TIMES：滞在されたMackayはどんな都市ですか?

若宮先生：オーストラリアの東海岸、BrisbaneとCairnsの中間に位置するMackayは、広大なサトウキビ畑と粗糖の積込施設が広がる商工業中心の都市です。

TIMES：派遣先のMercy Collegeでの仕事は?

若宮先生：主に日本語授業のアシスタントです。オーストラリアは、その地理的特性から、アジアの言語教育に積極的で、日本語学習も人気が高い。生徒たちはまだまだ流暢な会話ができませんが、学習意欲もあり好奇心が旺盛だという印象を受けました。

TIMES：現地で特に感じたことは?

若宮先生：日頃から世界の動向に目を向け、自分の考えを構築しておくことがコミュニケーションには必要だと改めて実感しましたね。「世界の動向」というと大げさに聞こえますが、「海外に対する好奇心」と読み替えてもいいと思います。また、幸運なことに滞在時期は、ミュージカルが公演される時期でした。生徒と教員が一体となって作り上げる舞台は完成度の高いもので印象的でした。舞台は町での注目度も高く、地元のニュースでも取り上げられるほどです。

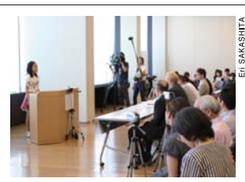
TIMES：本校の教育活動に活かせる提案はありますか?

若宮先生：「SKYPEを利用したインタラクティブな授業交流」を提案します。幸い日本とオーストラリアは時差が少ないですから、海外の同僚とのつながりを活かし、本校の授業に取り入れていきます。

TIMES：期待しています。ありがとうございました。

THE FRONTIER TIMES Report 1

「名古屋国際フロンティアカップ2010受賞者決定」



Eri SAKASHITA

毎年恒例の小学生英語スピーチコンテストも今年で3年目を迎えました。首都圏からの応募者も含めて総勢150名が会場に集まりました！2010年度のテーマは「COP10 in NAGOYA」です。10月から名古屋で開催される国際会議「生物多様性条約第10回締約会議（COP10）」を目前に練習を重ねた小学生たちがスピーチを競いました。多くの観客、COP10担当者、マスコミ関係者が見守る中、見事にフロンティアカップアワードを獲得したのは水野紗奈さん（春日井市立春日井小6年生）です。Congratulation!

パートナーシップ事業 COP10 AICHI-NAGOYA

2 男子陸上ホッケー部 インターハイ出場!

男子陸上ホッケー部が愛知県高校総合大会において見事優勝を果たし、沖縄県で開催された全国高等学校総合体育大会（インターハイ）への出場を見事に果たしました。陸上ホッケー部は2005年にわずか2名で創部され、その2年後には全日本中学校ホッケー選手権大会に出場するまでに急成長した本校でもユニークな部活動の1つです。日々の自主練習を中心に技能を磨き、近隣の向陽高校（名古屋市昭和区）との練習試合で実戦経験を積み重ねて、今年度初めて全国への道を掴みました。学内ではその成果を賞賛するとともに、今後の活躍に注目が集まっています。県外開催のインターハイへの出場に対してご支援いただいた保護者の皆様、保護者会SHIP様、同窓会の皆様に感謝申し上げます。

3 ワークショップ“シラバス研究会”

中高一貫コースでは教員の研修として、全国規模で開催される私立大学附属学校の教育研究大会「私学サミット」に参加する機会が毎年あります。全国の中高一貫校の取り組みから得られる貴重な実践やデータは、本校の教育活動にも活かされています。さらに今年度は夏季休業を利用して、教員のスキルアップを図るために校内で勉強会を開きました。カリキュラムやシラバス（学習指導計画）について、外部の専門家のアドバイスも受けながらワークショップを行うことで、教育の質の向上を進めています。

Misae AMAMOTO

Great Dialogue from the Movies

ジョージ校長の映画名セリフ集

“Forget it, Jake. It's Chinatown.”

「忘れちまいなジェイク。ここはチャイナタウンだ。」

ジェイク・ギテス（ジャック・ニコルソン）は、ロマン・ポランスキー監督の最高傑作「チャイナタウン（1974）」に登場する私立探偵です。水道局幹部の「妻」を名乗る女性が、「夫」が浮気をしていると彼に調査を依頼したことから、ジェイクは幹部の本当の妻（フェイ・ダナウェイ）と知り合い、1930年代ロサンゼルスにおける水道利権の不正を暴くことになっていきます。ジェイクと捜査担当の警官は、かつてともにチャイナタウンで仕事をしたことがありますが、そのことについては語りたがりません。チャイナタウンは「不運の象徴」であり、「何が起こるか分からない」場所で、誰かを守ろうとしても必ずその人を傷つけてしまう場所だからです。ジェイクの依頼人がチャイナタウンで殺された後、元相棒は彼に、生きてここから出たければ、チャイナタウンでは常に「余計なことはするな」と釘を刺しながら、この有名なセリフを口にします。この映画はアカデミー賞（脚本賞）を獲得し、アメリカ国立フィルム登録簿での永久保管作品に選ばれています。

In Roman Polanski's masterpiece Chinatown (1974), Jake Gittes (Jack Nicholson) is a private detective. A woman posing as the "wife" of the water commissioner hires him because she suspects that her "husband" is cheating on her. This leads to Jake's meeting the real wife (Faye Dunaway) and uncovering a water diversion scandal in Los Angeles during the 1930s. Jake and the police officer in charge of the investigation into the corrupt scheme used to work together in Chinatown. They don't like to talk about it, though, because Chinatown was "bad luck", a place where "you can't always tell what's going on" and where, when you try to protect someone, you end up making sure they get hurt. Jake's former partner delivers this famous line just after Jake's current client is killed in Chinatown, reminding Jake that in Chinatown you should always "do as little as possible" if you want to get out alive. The film won an Academy Award (Original Screenplay) and was selected for preservation in the National Film Registry.